

アスリートのための キャリア・トランジション勉強会

Newsletter No. 18

2006年 11月24日

第18回

アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会

【目次】

1. 「アスリートのキャリア・トランジション～内省のくりかえし～」 ゲスト：萩原 美樹子 氏 _____	1
2. 第18回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会 アンケート集計結果 _____ 2006年11月24日 勉強会参加者一覧 _____	14 16
3. 次回勉強会スケジュール _____	17

● 第18回勉強会報告書:

■テーマ■

アスリートのキャリアトランジション～内省のくりかえし～

■ゲスト■

萩原 美樹子(はぎわら みきこ)氏

株式会社ジャパンエナジー・CSR事業推進部

早稲田大学女子バスケットボール部コーチ

萩原さんとは以前に共通の友人を介して食事をしたことがあり、その後、ネット連載していたインテリジェンス×スポーツナビのセカンドキャリアインタビューにご登場いただいた経緯がある。

数度、お話をさせていただいて、感じたことは、現役時代からずいぶん深く内省をされている方なんだなあ、ということだった。どんなことを伺っても、「自分がそのとき、どう感じたか」ということを言葉で表現できる数少ない方であると思う。今回は、私にとっては改めて、これまでに伺えなかったことを、ぜひ直球で質問させていただきたかったので、ゲストでお呼びした。

(田中) 萩原さんには、あまりにたくさんのお話が聞きたいので、プロフィールを先にちょっとお話をさせていただけたらと思います。すでにこの皆様にお配りしているところをまず読んでいただいて。萩原さんはすごくトランジションが多いんですね、現役中の。たとえば、右という選択と左という選択があるのに、右に行った。次のトランジションでは左に行ったという、現役中の節目がじつに多かったように伺っております。

まず最初は、バスケットがとにかく好きだったという小学生時代があるんですね。

(萩原) もう本当に、今、考えるとなぜか分からないんですけども、すごく楽しくて。これは別に、はっきりとした目標などではなかったのだと思うのですが、当時、共同石油というチームが日本一だったので、絶対に共石に入って、大学にも行って、オリンピックに行きたいということを小学校5年生のときに思っていたんです。

(田中) 楽しいのは何でなのか、理由が分からないけれど、とおっしゃっていたのに、さらに質問して恐縮ですけど。何が楽しかったですか？当時？ スキルが上達するのが楽しかったですか、それとも、みんなと一緒にやるのが楽しかったですか、得点をしたときに楽しかったんですか。

(萩原) みんなと一緒にやるのは別にそんなに楽しくなかったです、どっちかという。小学校とか中学校の女の子って、群れるじゃないですか。友達がやっているからやりたいとかという気持ちは全然なくて、むしろ友達とけんかしてでも、私、やっぱりやりたいのと言う感じ。友達が、かったるいとか言ってゴム跳びとかして遊んでいるときに、いや、私はシュートするから、みたいな。1人でシューティングして余計嫌われるみたいな。笑。

(田中) そりゃ、女の子の間では、嫌われます。笑。

(萩原) 嫌われた。でもそれでも私、どっちかという友達と遊ぶよりも、そうですね、試合のときにシュートを入れる方がずっと楽しかったんですよ。やったーという、・・・顕示欲というんですかね、自己顕示欲。というか、マニアックなのかな。

(田中) シンクロ選手としての記憶としては、少し違っていますが、まさに、そういう顕示欲って、わかります。たとえば、まだシンクロ始める前に、私の場合は小学校高学年のときに、マニアックに、例えば卓球の大会が来週ある、学校であるとなると、もう朝5時に起きてマンションの裏で、何かそのへんのものを台にして、打ちっ放しをやっているとか、そのやっている雰囲気っていうのが自分で好きだったんでしょうね。笑。

(萩原) 分かりますね、よく分かります。

(田中) ドッジボール大会とかバスケットボール大会のためにシュートの練習を秘密でしたりとか、、、重野さんはどうですか。

(重野) ありますよ。

(重野) 自己顕示欲というふうに、今、聞いて、あ、確かに自己顕示欲だなと、ふっと思ったんですけど、ありますよ、そういう。別に誰もやっていないのに、1人で壁に向かってボールをけり続けているとかね。

(田中) 重野さん、鹿屋体育大学のときも確か、リフティングを何時間とおっしゃいましたっけ。何か異常に長い時間やり続けて、、、そのことにうれしくなったっていうマニアックなエピソードはいつでしたっけ。

(重野) どのぐらいできるかなと思って。そもそも、ずっとできるんですよ、ああいうリフティングというのは、やっていけば。でも、これずっとやってもばかだから、1,000回やろうと決めて、1,000回チャレンジ、それはできたんですけど。たぶんそういう感覚に近いのかなと。それは1時間ぐらいかかるんですよ。そうすると、見ているやつがいるので。何だ、こいつ、まだやっているなとかという、そういう感じのたぶん楽しみが、思いがあるのかなと。似ていますよ、そういうところはね。

(田中) バスケット。何となくだとは思いますが、そんなに明確に絶対にJOMOに入ってとか思っていらっしゃらなかったと思うとおっしゃっていましたが。オリンピックに出たいという、5年生の時に書いていましたよね。そして、中学でもバスケット部に入るじゃないですか。

(萩原) はい。

(田中) そのときに、これは何かすごく「オー」さんらしくて笑っちゃうのは、あ、全員オリンピックに行けるわけじゃないらしいということに気付いたと。それで、あ、そうなんだと。学校の先生になる方向にしようかなとも思ったけど、ただ両方やっていたらして、学業もそれからスポーツも両立するつもりで。ただ、そのときに、同時にこれからどんな道に進むとしても、死ぬまでバスケットはやっていくんだらうなと思ったと。これ、まったく違う方向じゃないですか。分かんないですけど、感情としてね。だから、その辺の中学校のときに、両方思った感覚が全然分

からなくて、あれは何かかと。

(萩原) まったく別の方向とは思わなかったですね。

(田中) やっぱりそうか。

(萩原) はい。自分の中では全部つながっているというか。小学校のときって本当に楽しくて、バスケットは。楽しくて、楽しくてやっているの、こんなに楽しくてやっているから、当然オリンピックに行けるんだらうとか思っていたんですよ。そうしたら、東北大会とか、私は出身が福島県ですけど、そういうブロック大会なんかに行くと、当たり前ですけどもっと強いチームがあるわけですよ。こんなに強いチームが世の中にはあるんだとそのとき初めて知ったりして。笑。

中学校に行って、やっぱり、例えば進路指導とかで、将来なりたいものから現在に下りてきて自分の行く高校を決めなさいとかいうのを書かされたとき、オリンピックと言っていたけど、どうも何か全員行けるわけじゃないっぽいしなあと初めて考えた。その代わり、地元で小学校の先生になるというもう一つの夢を、じゃあここでもう1回追いかけて直して、別にオリンピックに行けなくても、やっぱり私はバスケットがすごく好きなので、学校の先生で社会か国語あたり教えながら、バスケットを教えるのがいいかなと思ったので、、、全然別ではないんですよ。

(田中) オリンピックにはそこまで執着しなかったということですよ。そうでしたね、逆に言えばね。

(萩原) はい。

(田中) なるほど、、、。私も、ちょうどまだ中学1年生ぐらいのときに、何だ、みんなが日本一になれるわけじゃないんだと気付いて。そのときに、なぜかというと同じ年のレベルでたくさん全国大会に行くと上手な人がいて、私のできない、くるくる回るスピンのできる人を見て、うわって思っ。ふっとそのときのセルフトークは、面倒くさいと思ったんですね。面倒くさい。1番になるには面倒くさいプロセスを通らないとだめだなと思ったのに、なぜか私は続けたんですよ、、、。重野さん、何かどうですか。すごい、いきなり振るんですけど。

(重野) 僕の場合はちょっと違って。萩原さんが言われたように同じように、私も学生時代に、「ああ、一生サッカーにかかわるんだ」という体験をしているんですけど。そのころから、小さいときからそうですけど、ずっと日本代表になりたいとかって思っているわけですよ。ただ、誰もがなれるわけじゃないから、そこに執着するのはむだかもしれないと思ったんですね。

なぜかという、すごくまい人が中にいるわけですよ、サッカーでも。そうじゃないチームのある人が優勝とかしているわけですね。それを見たときに、日本一になった人が必ずしも日本で一番優秀とは限らないということを知ったときに、別に勝つとか負けるとかじゃないところで目標を持たなきゃいけないんだなというのは、すごく感じたことがあったんですね。

(萩原) それはいつごろでいらっしゃいますかね。

(重野) それはね、高校生ぐらいのときかな。もう誰も手が付けられないスーパーなやつがいるんですよ、やっぱり。

(田中) そうか、チームスポーツだとそうですね。

(重野) うん。

(萩原) そうですね。

(重野) そのチームが別に優勝とかしているわけじゃないんですね。でもその人個人で見たらものすごく能力があって、誰もが認める選手がいるんですよ。それを見たときに、ああ、確かにチームで日本一になるのはすごいけれども、必ずそれがトップではないなという変な悟りをしたことがありますね。

(田中) ごめんなさい、ちょっと。その悟りってよくない悟りだと後で思いましたか、それとも後になって、あ、それがよかったんだというような。例えば、私がもし現役の選手だった、あるいは現役のコーチのときだったら、そういう悟りをする選手に対してはすごくきつく言うと思うんです。何、悟っているの、というような。分かりますか、コーチをしていらっしゃるから、今。

(萩原) 自分がそうだったというか、自分が現役のときまさにそういう選手でしたよ。日本一ってそんなこだわって何があるのとか。実業団の日本一のチームに入りながら、負けて悔しくないのかと言われても、悔しくないよとかってよく言ってる。

(田中) わあ、面白い。それってよかったと思いますか。後になって、ああ、あのときもつと泥臭く考えときゃよかったなと思いますか。それともそうじゃない。

(萩原) いや、でも、考えられなかったですから、泥臭く。だから、後から考えればよかったと思いますね。

(田中) 面白い。すみません、すごく泥臭く生きていたものですから。

(重野) 泥臭いんですよ。なぜかと言うと、例えば負けて、出ている人も出ていない人も一緒に落ち込むんですよ、負けるとね。すごく大事な試合で負けると落ち込むんですけど。別に落ち込まなくていいじゃないかと思うことがあるんですよ。その人はその人で、努力すれば必ず次のチャンスがめぐってくるわけですから、みたいな方に意識を変えていたので、あまり、単純に結果だけを見るというのはしなくなったんですね、そのころから。自分のできることをやればいいと。

(田中) 面白い。私、たぶんわざと高2ぐらいから、結果だけを見つめようという方に思った方だったんです。わざと逆にした。

(萩原) ああ、そうですね。

(田中) 面白い。すみません、ちょっとどうしてもそこに引っ掛かっちゃったので。さて。高校にもお進みになります。そして、本当は大学進学は全然するおつもりでいたのに、、、。

(萩原) そうです。

(田中) ですね。共同石油から、今のジャパンエナジーですけど、お誘いがあった。結局、大学に行かなかった。これは、要は大学進学かプロかという、必ず皆さんが、プロがある、実業団がある競技ではお考えになるところですけども。なぜそこでプロに、プロにというか実業団に行ったのでしょうか。

(萩原) やっぱりむちゃくちゃ悩みまして。そもそも中学校でいったんオリンピックというものをあきらめたというか追わなくなった時点から、そこから大学に、筑波に行きたかったんですけど、大学に行って学校の先生になるという方向で、いわゆる進学校の高校に行って勉強してきたので。なのに高校 2 年のときに、共同石油の監督の方から、ちょっとうちへ来てみないという声を掛けていただいたという。

すごくやっぱりびっくりして。うちの高校というのはバスケット界では全国的に無名というやつだったです。それが一度は夢見た共石から声が掛かっちゃったから、これって何なんだろうと思ったんですよね。高校 2 年のときに声を掛けていただいたので、最終的に決めるまで 1 年ちょっと、ずっと考えていたんですけど。

結局決め手となったのは、勉強というのは後からでも出来るのかなという判断をしたのが 1 つ。声を掛けてくださった監督が、勉強は後からできるよと言ってくださったんですけども。あともう 1 つは、さっき日本一ってキーワードにありましたけど、うちは日本一のチームだと。あなた、筑波大学とかに行きたいと言っているけれども、例えばバスケットを筑波で、筑波大は今でもバスケット強いんですが、バスケットを大学日本一の筑波でやるのもいいけど、日本一がいいんだったら、うちは日本一の実業団だよ、と。勉強にしたって、年間東大、東大は日本一の大学ですよ、年間東大に入る学生は何百人とかいるのに、うちに来れば日本一になるのはたった 12 人と。12 人と何百人とどっちがいい、みたいなことを言われて。それで、今できることをやったら？ということ言われて。

最終的には、私は中学のときにバスケットにはたぶん一生かかわるだろうと、もうほとんど直感みたいなものですけど、そういうふう思ったんです。結局バスケットに一生かかわるつもりなのであれば、勉強しながら筑波大学に行くんじゃなくて、今は、今しか出来ない実業団に、ちょっと行ってみようかなというふうに、最終的には変わりました。

(田中) このお話を伺ったときに、すごく共感したんですけど。同じように、私も、その「自分は何人のなかの人間になれる」というような数値で私は決めたいです。高校 3 年のときに、私も筑波大学に行きたくて。

(萩原) ああ、そうですか。

(田中) そうですよ。だけどだめだったんですね、スポーツ推薦がだめで。そもそもシンクロってインカレがないものですから、当時は不利で。私も勉強がもっとできれば入れていただいたのかもしれないけど、だめで。まあ、そもそもは、スポーツで大学に行くというよりも、下からずっと行っていたカトリックの女子校があったものですから、そのままエスカレーターで、その女子大に行くのが、田中家での夢、敷かれたレールだったものですから。そんなもの、シンクロなんか高校 3 年でやめて、もうちゃんと女子大に入って、いわゆる田中家で敷いたレールにそのまま乗っかっていきなさいと。

そのときに勝手に自分が考えたことが、父や母が言う、聖心女子大学というところに行く女子大生は世界中で何万人になるか分からないけど、とにかくたくさんいると。究極、別に頑張れば誰でも行けると。だけど、私が狙おうとしている 4 年後のソウル・オリンピックでのメダリストにもしも万が一なれたら、それはもう世界中で本当に数少ない人間だと。どっちの人間に、もしかしたらなれるかもしれないんだしたら、懸けてみるかという、そういう

人数が。だいたいそんな感じ。

(萩原) そうですね。

(田中) ね。その少ない人数の中にもしも自分が入れるなら。

(萩原) 入れるのかな、というね。

(田中) 何かありますか。

(重野) すごいなと思って。単純に聞いていました、今。

(田中) 本当。

(重野) はい。

(田中) そういうふうに、重野さんはそういうのはなかった。

(重野) とらえ方としては似ているんですけど、結果的には。そういった整理は付けてなかったですね。

(田中) 高3のときに。

(重野) うん。ひたすらやるんだと。

(田中) 高3のときに確か鹿屋体大に決めたのがあれですよ。

(重野) 高2のときに決めたんですよ。

(田中) 芝。

(重野) 大学のグラウンドが芝だったから、以上。グラウンド整備でまめを作っていたんですよ、いつも。

(田中) 笑。

(重野) 俺は何部だよとか言いながらやっていたんですよ。

(田中) そうですけどね。

(重野) テレビをつけると、当時まだJリーグはなかったですから、海外のプロチームは当然芝生でやっているわけですよ、試合を。サッカーって普通芝生でやるよなと思いつつ、ガリガリガリガリ削っていてまめを作っていたので、サッカーは芝生でやりたいなと。たまたまそのときに芝生の大学の情報を得て、ここしかないなとい

う単純な理由ですよ。

(田中) そうですよ。Jはそのときになかったんですものね、まだね。

(重野) もう産声を上げていたんですけど、形にはまだなっていなかったですね。

(田中) で、萩原さん。大学をあきらめて。あきらめてというか大学は選ばずに、そのころの共同石油に入ります。監督さんも日本代表にしてやると言ってくださって。びっくりしたんですよ、練習に。

(萩原) そう。練習にびっくりしましたね。

(田中) もう楽しいバスケットではなかった。

(萩原) はい。一気に嫌いになりましたよね。

(田中) どのぐらいの期間で嫌いになりましたか。もう最初から。

(萩原) もう最初の1週間じゃないですか。もう本当に。

(田中) 最初の1週間で。

(萩原) 監督が、別に監督のせいじゃないんですけど、うまいわけですよ、そういうところを結局、誘う時には、一切言わなかったわけですよ。いいことばかり言っていたわけですね。もちろんある程度分かってはいたつもりだったんですけど、日本一のチームに行くんだったら、日本一のそれなりの練習が待っているだろうとは分かっているけど、そういう頭で分かっているのと実際に体験するのでは、全然違う。もうね……

(田中) 代表の練習って嫌ですよ。

(萩原) 嫌ですね。嫌でしたね、初めは。

(田中) 嫌ですよ。代表の合宿に私も初めて行ったときに、絶対今年でやめようと誓いました。

(萩原) 分かる。

(田中) うん。1シーズンはやっぱりいなきゃいけないから、もう絶対やめるって、毎晩。そのころのデュエツパートナーで先輩の伊東恵さんという、同じクラブで、1つ上の、いつもお姉さんのような存在で、私を支えてくれる方がいらして。その方と一緒に1年目入ったものですから。それも高校1年、15歳のときに、最年少といわれて代表に入って。もう毎日毎日泣いて。「メグさん、明日、練習に行きたくない。行きたくない」。「京ちゃん、ここは代表のチームだからね」って。笑。お風呂でも、「もう今日はここ痛くて、足首が痛くて」、って、ベそかいて、毎晩言っていて。もう必ず今年でやめると。練習の最中によく言っていました。

メグミさんに、「京ちゃん、わかった、わかった。来年やめてもいいから、まず今日の練習はちゃんと頑張ろう

ね」とか言われて。ホント、支えてもらってましたけど、練習は、嫌ですよ。

(萩原) 嫌ですね。まるきりそうですね。私も、初め、大学に行ったつもりで来いと言われてたんですよ。だから、私、4年後には絶対やめるからということ、もう絶対、絶対やめるからと言って、それを頼りに日々やっていたというか。

(田中) おそらく、期間限定にしなきゃやっていけないですよ。

(萩原) やっていけないですね。何でもそうですけど、あまり先を見ちゃうと、乗り切れないなという感じはしますね。

(田中) ただ、続けるんですよ。もう逃げ出そうと思うじゃないですか、合宿とか、逃げ出そうだとか。それこそ、萩原さんは、あり得ない行動をしようとするんですよ。

(萩原) そうですね。

(田中) きっかけは何ですか。

(萩原) 本当にあり得ない行動というか。2階から飛び降りて骨折すれば、明日練習しなくていいかなとか。死ぬのはイヤなんだけど、骨折くらいなら。そうですね、あとは脱走するとか。何かそういう、本当にそういう行動はすごくしたかった。でも実際には脱走しないで、何とか踏ん張って、そこにいたんですけどね。まずやめられなかった理由の1つは、見栄っ張りというのがあるんですけど。親が頑張ってこいって送り出してくれたものを、今さら逃げ帰るといったら、親のところしかないわけですよ。格好悪いなとか。あと、福島を出るときに、先生方みんなが頑張ってこいみたいな会を開いてくれたわけですよ。申し訳ないな、とか、何かそんな見栄の部分でやっこ1年続けて。

結局1年たって、でも全然、いわゆるスタメンというのにはなれなくて。毎日脱走のことを考えているくらいだから、うまくなるわけがないんですけど。どうやったらやめられるだろうとか、それこそ悔しくないのかと言われても、「悔しくありません」とか思ってたし。

だから1年たったところで、4年間と言ったけれども1回ちょっとここで考え直そうかなと思ったときに、私と同じポジションだったスタメンの先輩が1回リタイアするということがチーム事情で起こって。そのときのチーム事情の中で、そのポジションをできるのが、みそつかすの私しかないという状況になって。これは何が何でもやらねばという状況になっちゃったんですね。

(田中) それで逆に、「何が何でも」に、なるんですよ。最初は嫌々だけれども。

(萩原) そうです。

(田中) そのポジションを取ろうと思うんですよ。その人が帰ってきてもね。

(萩原) はい。

(田中) 実際に取っちゃうんですよね、そのポジションをね。

(萩原) そのポジションは結局だめだったんですけど、コンバートして、ポジションを1個上に上げて、そのポジションを取りました。

(田中) そのとき、バスケットはまだ好きじゃないんですか、そのとき。

(萩原) 好きか嫌いと言われると、あまり好きじゃなかった。

(田中) だけど好き嫌いでやっていないですよね、そのころになったら。

(萩原) もう好き嫌いじゃないですね。

(田中) そうですね。よくプロの方ってそうおっしゃいますよね。好きとかいうカテゴリーで選ばないとおっしゃいますよね。

(重野) そうですね。だんだん競技のレベルが進んでくると、自分からやめたいということが言えなくなっちゃうんですよね。むしろ、相手にやめろといわれるから。そこまでどうやってやるんだというふうに、切り替わっちゃうんですよね。それは非常に具体的ですね。

(田中) そうですよ。それで萩原さんは、1996年に、結局でも、日本代表になってアトランタ・オリンピックに出場して。本当は、ここで7位入賞という素晴らしい成績で、パフォーマンスはすごく納得のいくものだったと。いわゆるピークというか、ゾーンに入った感覚のいいプレーができたとおっしゃっていて。引退するおつもりだったんですよ、アトランタで。

(萩原) そうです。ずっと毎年やめると言っていたんですが(笑)、オリンピックって1つ区切りだと思ったので、オリンピックが終わったらやめようとまた思っていました。

(田中) それはおいくつのときでしたか。

(萩原) 26歳かな。ですね。

(田中) でもやめなかったのはなぜ。自分からやめないと決めてアメリカの話があったんですか、それとも、アメリカの話があったからやめなかった。

(萩原) アメリカの話があったから続けようと思いました。

(田中) なぜ。

(萩原) そういう好きとか嫌いとか、もうそういうのを超えたような状況で毎日バスケットをやっていたので、1つオリンピックってやっぱりすごく大きなイベントというか、達成感ですよ、そのすごく大きな目標を達成したとい

うところで、やっぱり軽い「燃え尽き」みたいなものになっていたんですね。で、どっちにしろそろそろやめ時だからと思っていたところに、また違う目標をセットされたと思ったんですよ。オリンピックみたいな大きなことじゃなくて、今度はアメリカのプロリーグですね。新しい環境という、また全然違う目標が自分に与えられたので、まだオリンピックじゃない取り組むものができるのかなと思いましたね。

(田中) たぶん私は答えを分かりながら質問しているのかもしれませんが、伺いたいのは、アトランタ・オリンピックが終わった後に、もう、要はバスケットの萩原としては、頂上とは思っていらっしやらないのは分かるんですけども、もうこの後にシドニーに行っても使ってもらえるしとか、もうそこまでは疲れたから、実業団のジャパンエナジーでずっと、戻って別に競技生活も続けられるし。でも、新たにちょっと怖いじゃないですか、環境が変わるのも怖いし、英語も怖いしとかいろいろあるのに。なぜそこで、いわゆるそれなりの、それなりと言ったら失礼かもしれないんですけども、いわゆる安定のところに行きたいにもかかわらず、もっと上を目指した動機かな、やる気は何でしょう。

(萩原) まず新しい目標が与えられたということがすごくうれしかった。結局、動機がないと動けないと思うんですよ。どんなに体とかがきちんとケアがされていても、毎日 6 時間とかバスケットをやっていると、強い動機がないと、日々の練習でさえやっぱり乗り越えられないんですね。オリンピック、さっきも言いましたけど、1つ終わったときに、次、私は何のために毎日の練習を乗り越えていけばいいんだろう、って思った。他の選手もそうだったみたいですね。でも、私にはまたすごく大きな動機を与えてもらったというのが、単純にうれしかったというのが1つありますね。

あとは、やっぱり、オリンピックに行ってる程度自分のパフォーマンスというのがいい形でできたので、これでアメリカに行ってもどこまで自分ができるんだろうというような、プレーヤーとしての欲が当時はあったと思いますね。

(田中) 重野さん、1度戦力外通告を受けた後に、1度は指導をされますよね。あ、違う、大学院に行かれるんですね。

(重野) はい、そうです。

(田中) でもその後に、やっぱりどうしても自分の選手としての燃焼ができていない気がして、アメリカに行かれる。

(重野) ええ。

(田中) それは新たな挑戦ですか、それとも萩原さんと似ていらっしやる、それとも違う。

(重野) 萩原さんの場合はお話をいただいたんですよ。

(萩原) そうです。

(重野) 私の場合は逆に、自分から求めて行って。けりをつけたかったんです、自分に。自分のその未練です、いわゆる。未練がすごく強かったものですから、それにけりをつけるために知らない世界にチャレンジしよう。

外国に行けばまったく自分が知らない世界に入っていくことになるから、どうせチャレンジするならこれをやろうと、それでだめだったらあきらめよう。そういう心境ですね。

(田中) それは何に対しての「けり」？。

(重野) 自分のその未練。サッカー選手に対する未練がすごく強かったんですね、当時。

(田中) ちょっと先の話になっちゃうんですけど、それはけりとか未練というのは、すごくよくトランジションのキーワードな感覚がいつもよくするので、ちょっと今に話を飛ばしますけど。今、けりついてますか、ご自身にとって。

(重野) 飛びましたね(笑)。

(萩原) 選手としてのけりですか。

(田中) 分かんない、何だろう。まず質問は選手としてのけりかな。もう1つは究極のバスケット人間としての。

(萩原) 選手としてのけりはもうきれいについています。

(田中) どこでついたんですか。

(萩原) 引退したときに。1999年の1月に引退したんですが、全日本選手権って大会です、お正月の天皇杯・皇后杯トーナメントがバスケットにもあるんですけど、あれでたぶんさっぱりけりを。

(田中) 自分でつけようと決めて引退したんですか、それとも、引退してから、あ、ついたなと思ったんですか。

(萩原) 自然につきました。そのシーズンは本当にいっぱいいっばいで、毎日、もう何にでもそれこそ動機探しですよ。何でもいから動機をくれそうなものにすがりつく。もうとにかくここまで、ここまでと言い聞かせながら、毎日自分を奮い立たせている状況だったので。オリンピックが終わって、アメリカが終わって、というかアメリカで戦力外通告をされて、帰国してジャパンエナジーに戻って引退までの期間は毎日もうやだ、もう勘弁して、ツライ、ツライ、でもやらなきゃ、とか言いながらやっていたので、もう終わったときは、ほんとに……。この大会は優勝して、本当にありがたいことなんですけど最高の形で終われたので、選手としての未練とか、けりというのはもう完全についちゃいました。

(田中) そこまでもう1回質問しちゃうんですけど。そのとき、引退、最後のシュートだったとかいうのがたぶんあると思うんですね。

(萩原) ありますね。

(田中) そのときの気持ちは。

(萩原) 最後のシュートが、私の得意なプレーだったんです。相手がシャンソン化粧品といってずっとライバルで、当時国内で二強といわれていたチームで、必ず決勝で当たるチームだったんですね。私とマッチアップする、ぴったり付いてくる選手がやっぱりライバルで、日本代表チームのときはすごく仲のいいチームメートなんですけど、そうやって敵味方で 10 年間ずっと一緒にやってきたプレーヤーだったので、私の得意プレーも全部熟知されていて。

それでその試合までずっと押さえられていたプレーだったんですけど、一番最後何かひゅつとした瞬間に、それができた。彼女が気を抜いたかもしれないんですけど、それがだめ押しポイントになって、最後勝てたというのがあって。あれはもう子供みたいなガッツポーズしていましたよ。

(田中) それはうれしいですね。それが最後のボールというイメージ。

(萩原) そうですね。

(田中) ああ、もう練習しなくていいと思われたのか、それとも、ああ、寂しいな、なのか、どういう感覚でしたか。

(萩原) 練習しなくていいな。

(田中) やっぱりね。ごめんなさいね(笑)。ああ、そう。すごく同じ経験があるんですけど、逆に、ごめんなさい、重野さんに変な質問をしますけど、戦力外通告ってね、最後だとかいうロマンチックなものを自分でつukれないで終わっていらっしやるでしょう、日本では。

(重野) そうですね。

(田中) ですよ。それだからこそアメリカにいらしたりとかしている。

(重野) それはすごくあると思いますね。

(田中) ね。

(重野) はい。

(田中) アメリカではそういうのは何かあったんですか。

(重野) 行ったときは、逆に僕は動機を探しました。要は、「海外で選手になりたいといってなれて、なったけど何を探せばいいんだ、自分は」という状況ですよ。とにかく点をたくさん取ったとしても、別に日本の J リーグに復帰できるはずはないし、ヨーロッパなどのチームに行けるわけもないし、みたいなことをずっと考えていて。何のためにやっているのかなというのは、シーズン中ずっと考えながらストレッチをやったりとかという感じでしたね。

(田中) じゃあ、何となく尻切れとんぼで終わったんですか。それとも。

(重野) 完全に尻切れとんぼですね。

(田中) それは尻切れとんぼだと言える重野さんもすてきですけども。わざと聞いているような、初めて……

(重野) 初めて言った。

(田中) すみません、すみません。

(重野) 痛いですが、今のは。

(田中) ごめんなさい。えーと、萩原さん、、、。ただ、結局、その後、勉強はいつでもできるからということで大学にいらっしゃるじゃないですか。大学だけじゃなくて、今、大学院も行っていらして。よくね、いろいろな方に、萩原さんって成功事例ですね、とよく言われるんですよ。私が、例えばいろいろなプログラムをしても、萩原さんのお話、すごく悩んでいらっしゃるし、すごく転機も、いわゆる一般的に見ると、大学院にも今、入っていらっしゃる、そして今、ジャパンエナジーでお給料も当然いただいている、それだけではなくコーチもなさっている。好きなバスケットもし、会社にもいらして、しかも勉強もやっていらしてって、こんな人いないと。だから悩んでいないだろうと言われるんですけど。どうでしょう、そのあたり。自分ではそんなふうに思っただけでいらっしゃらない、何か悩んでいらっしゃる、最近は。そうでもない。

(萩原) 常に悩んでいるんですけど。

(田中) 引退は何年でしたっけ。

(萩原) 引退したのは1999年なので。

(田中) そうですね、もう7年か。

(萩原) そうですね、7年。

(田中) その7年間で、結構好きな勉強をもう1回やり直そうとか、あるいは早稲田に、今度は大学院に入ったときは歴史じゃないじゃないですか。

(萩原) はい。

(田中) プロセスをちょっともしお話しただけなら。いろいろ悩んで、結局、今は新しく何に悩んでいるのかをちょっと聞きたいと。

(萩原) 1999年の1月に引退したんですけども、引退してから考えたというよりは、引退に向かいつつあるときに次どうしようかというのは同時進行で考えていたんですけどね。私は大学、勉強を後回しにしたんだと、それがバスケットボール選手としての私であって、小学校からそうやってずっとバスケットをあきらめたり、逆に選んだ

りしながらやってきた、萩原美樹子という人間としての順番みたいなものだ、そういうふうに思っていた。大学は絶対行くものというか、いや絶対行くべき、くらいにまで思っていて。だから、引退をして次の道はやっぱり大学だろうなというのは、もうそのときは考えていたんですね。

ただ、周囲の方には大学に行って、じゃあ何するのと言われる。特に、私は大学で日本史をやりたいかったので、日本史で大学へ行って研究者になるの？と言われると、別にそんなつもりもない。でもとりあえず大学には行きたいんだということを言って、1年ぐらい受験勉強をするんですけど、Z会とかで(笑)。

(田中) すごい。本当。

(萩原) 予備校の通信教育です。

(田中) 本当？

(萩原) はい。年とかは書くときはすごく恥ずかしいんです、30歳だったですから。そんなのをやって。でも、実際大学に行ってみると、歴史の勉強は楽しかったですけれども、卒業間近になれば、えーじゃあ次どうするのというのがまた出てくるわけですよ。で、そのときは大学と並行してバスケットの、私たちはクリニックって言い方をするんですけど、講習会ですよ、お子さん始め色々な方にバスケッスを短期で、1日とか2日ぐらいでポイントを教えるということ、仕事としてやっています。だんだん子供にバスケッスを教えるということに対して、何も知らない自分が教えるということがだんだん怖くなってきた頃だったんですね。経験だけでもの言っちゃうと、私は実業団でこういうことをやってきたからこれはいいと思うって、それが小学生に合うとは限らないじゃないですか。限らないというか合わないですよ、絶対。なので、呼んでいただいて、お金も払っていただいて、これしか教えられないのかというのがだんだん自分の中で苦痛になってきた頃だったんです。

じゃあ、次はバスケッスにかかわっていく上で、スポーツを教えるってどういうことなんだろう、みたいところに自分の中で興味対象が移っていった。それで大学院でスポーツ倫理学、スポーツ教育学をやっていたら先生がいらしたので、そちらの方で今はお世話になっているんです。

(田中) すごい。今の悩みは。

(萩原) 今の悩みは、この間その指導教官に怒られまして、あまりにも大学院に行かないので。授業全然出ない、いいかげんにしなさいと言われて。

(田中) じゃあ、現実的な悩みですね。

(萩原) 恥ずかしいくらい現実的なんですけど、先々につながってくる悩みでもあって。私、今、早稲田の女子バスケッス部を見てるんですけど、現場を持ちちゃうとものすごく時間が拘束されるんです。当たり前ですけど毎日練習に行かなくちゃならないし。練習だけに行けばいいかって言うとそんなことなく、例えば、今日も試合をやってからこちらに来たんですけど、シーズン中はビデオでスカウティングをする必要もあるわけですね、相手チームの戦況分析です。それを自分で家に籠もってやったりとか。分析して対策立てて、練習計画作る。それに、選手の心理的なケアもコーチとしてはしなければいけないときもあったり、就職相談に乗ったり、やりたい戦術の調べモノをしてみたり。結構そういうのに時間を取られたりとかして。そういうことでいっぱいいっぱいになっちゃうと、ちょっと論文とかの方に気持ちが行かないんですよ。

そうしたら、現場に重心を置くのか、研究の方に重心を置くのか、そのどっちかはっきりしなさいと先生に言われて、どうしようかなと。年内にはどっちか。どっちも私はたぶんかかわっていくと思うんだけど、重心をどっちにするかというのは、もうそれを決めないと、来年から先決められないなという。

(田中) でもそれってずっとお小さいころからの悩みと一緒にですね。

(萩原) そうですね。

(田中) 勉強かバスケットか。

(萩原) そうです、そうです。そのときそのときで、重心はこっち今度はこっちって、ふらふらやっているんだと思うんですけど。研究ベースでこれからやっていくにせよ、現場ベースでやっていくにせよ、私、選手としてのキャリアというのはそれこそけりつけたぐらいはあるんですけど、どっちも未知の世界なんですよ。コーチは、一応かじってはいますけど。今、ここに選手がいないから言っちゃうと、試合だぞという、実は試合中何回もテンパるんですね、こういうときどうすればいいの、とかって。

(田中) 本当だ。

(萩原) 経験自体が少ないので、やっぱり分からないこともたくさんあるし、だからコーチングの勉強というのもしっかりしたいと思うこともあるし。そうすると、コーチングの勉強をしながら今やっているスポーツ教育学の論文というのはやっぱりちょっと厳しいんですよ。どっちか今、選ぶ必要があるのかな。今、必要なことをちゃんと見極める必要があるのかなというのが、昨今の悩み。

(田中) 面白い、面白い。悩みますよね。

(萩原) 悩みますね。

(田中) 悩むポイントが、おそらく私が勝手に自分が、あ、きっとこうだろうなんて勝手に思っているのは、向学心というか、探究心というか、新しいものに挑戦するということはすごく、私は主軸でいつもあるんですね。絶対何か違うことを、今日の自分よりは明日の自分がもう1つ違うものを知っていたいというのが、ずっと小さいころからあって。だけど生きる意味付けみたいなものを、何か20代はじゃあ、これで生きる意味付けにしようとか、30代はじゃあ、これを生きる意味付けにしようみたいにならなくてずっとチョイスしてやってきているのも、ワードとしてやっぱり生きる意味付けって、先ほども意味付けっておっしゃったけど、すごくあるんだなと思って。

だから私、今日初めて、ああ、そういえば自分に忘れていたものがあると思ったのは、けりをつけるというのを、そういえば選手のときにはけりをつけたけど、その後、もう18年間私は選手じゃないんですけど、あ、どこにけりつけて今、動いたんだっけと思って。あらためて、過去にもう1回戻って、18年間どこにけりがついて私はプロセスをしているのかなというのを、ちょっと思い返そうなんて思って。向学心がすごくありますよね。向学心ってひとまとめにしちゃっていいのか分からないんですけど、新しいものに挑戦したい好きというか。

(萩原) いや、案外そうでもないと思いますね。

(田中) あ、そう。

(萩原) どっちかという、怖い、憶病。新しいものはやっぱり怖いですね。

(田中) そういうふうに思っていましたか、今の、聞きながら、びっくりしちゃった。

(重野) 怖いという発想になりますね。

(田中) そうですか。

(重野) ただ、萩原さんの場合は、物事が向かってきたと思うんですよ。毎回、毎回、日本であれ、アメリカであれ。

(田中) そうだ。アメリカもそうだ。

(重野) そうでない人って自分でやらなきゃだめでしょう。そんな怖いとか言っていられないんですよ、逆に。

(田中) そうだ。そうです、そうです。

(萩原) そうですね。だからそういう意味では、成功体験というふうにさっきおっしゃっていただきましたけど、たぶん恵まれていると思うんですね。でも、自分がやっていたこと、こうやっていこう、次どうしよう、次どうしようというときは、一応自分で選んで次のステップを積み上げていくしかないんで、そこで立ち止まってものすごく考えるんですよ。石橋たたいてほんとに大丈夫か？という。で、結局は渡れないぞという。

(田中) 渡れない。

(萩原) すごく、やっぱり、次の一歩を踏み出すのは本当に怖いと思うし。

(田中) そうか、そうか。

(萩原) でもそれは成功体験かと言われると、じゃあ、成功って何よ、って思ったりとか。

(田中) そうだ、全部求められているんだ。

(重野) そうですよね。

(田中) そうか。そうですね。私なんかは、やっぱり選手を終わった後は、自分がやりたいことにことごとく、裏切られた、ことごとくやらせてもらえないからなって、自分でつくんなきゃいけないというので。そうか。

(萩原) でもね、大学に日本史をやりに行ったときに、早稲田の第二文学部に通ったんですけど、あのときは一切誰も求めてくれなくなりましたね。だから、あの 4 年間というのは私にとって非常にモラトリアムの時期だっ

た。大学の4年間って何歳で入ってもたぶんモラトリアムなのかなと思うんですけど。それまで、いいプレーだとか「バスケットの」萩原選手ということで、萩原「選手」ですよ、そこに求められているんなことしてた自分が「自分」で、じゃあ、私は大学に行きます、日本史やります、バスケットから足を洗いましたと言った瞬間、みんなさあっと離れたわけです。そのときはやっぱり、プチ引きこもりになりましたよね。

(田中) あ、本当。

(萩原) はい。

(田中) やっぱ。そう。

(萩原) それこそ一歩出すのは怖いから、とにかく怖いものだから、どうすればいいんだろうみたいな。5年間で、留年しているの。

(田中) この辺を本当は聞きたいんですけど、時間がないんですよ。

(重野) もうちょっと1つ、2つ。

(田中) どうぞ、どうぞ。

(重野) 様々な順番のお話をされたのですが、あれはいろいろな出来事で成長されてきた背景につながっているはずだと思ったんですけど、お父さんの影響ってあるんですか。

(萩原) ありますね。例えば、私はバスケットを始めるきっかけになったのは父です。うちの家族会話、家族団欒ですね、そのときは、私と父はもう常にバスケットの話なので。思春期とかによく、お父さん、ちょっとこっちは来ないでとか、汚いとか、よく友達とか言っていたりしてたけど、私はそういうことは一切なかったです。今でもふっと思うと、やっぱり父ですね。

(田中) 面白い。

(重野) だからきっとそういう関係があったんじゃないかなと思って。逆に今、早稲田の学生さんを見ていらして、手に取るように分かるような立場にいらっしゃるのかなと思って。

(萩原) すごくよく分かりますね、それは。先行きが見えない学生だとか、自分の居場所が分からないとかは、やっぱり。分かるというと信じてもらえないかもしれないんですけど、でも自分の感覚としては、よく分かります。

(重野) そうですね。

(田中) 私たちばかりがしゃべってしまいまして。ちょっと質問をもし、何かございましたら。

(質問) 非常に興味深いお話を聞かせていただきまして、ありがとうございます。バスケットボールとすごく長

い間お付き合いをされていて、もしも萩原さんにバスケットボールがなかったら、何とかかかって来られたと思いますか。

(田中) 面白い。

(萩原) バスケットボールというものがこの世に存在しなかったら、何か違うものにかかっていたと思うんですけど、バスケットボールというものがこの世に存在する限りは、絶対かかったと思います。

(田中) 面白い。

(萩原) 絶対それは思う。

(質問) では、これから先もバスケットボールとはかかかって。

(萩原) そうですね、たぶん。小学校、中学校からそう変わらないんですけど、かかかっていくだろうなという思い込みみたいなものがあって。ただ最近、それって単なる思い込みみたいなもので、あんまり「運命！」みたいなにはめ込まなくてもいいかなというのは、考えてみたりもしますね。でも、たぶんかかかっていくと思います。何となく。

(田中) ありがとうございます。ほかに、はい。

(質問) 分かりました。あと、もう1点が、大学で指導されているということですけど、私の場合はやっぱり部活動というのをやっています、特に今、指導者がいないような部活の主将をやっています。1年生から4年生、同じ学年の中でもモチベーションの差というのがすごく差があって、それをそろえるのに大変苦労したなというのがあります。もし、今、やっているところで、1年生と4年生とか、同じ4年生の中でもレギュラーだったり違うと思うんですが、モチベーションの差があるのかなのかというと、あるのはどのようにしてモチベーションを上げていくのかということをお教えいただきたいなと思います。

(萩原) 非常に、私が今、直面している問題で、ありがたいご質問なんですけれども。私は実業団出身なので、実業団のときというのは、もちろんうちは日本一だったし、「日本一になる」というのが目的として大前提であって。日本一になりたい人間が来るから、そのモチベーションの差というのは多少あれど、そんなに大きくその差は変わらないところだったんですけど、大学ってそうじゃないわけですよ。そこはやっぱり始めは、同じ目標を持たせる、動機付けするということに苦労しました。今は交換日記をしています、選手一人一人と。

そうすると、今の選手、今のお子さんたちでもしかしてみんなそうなのかもしれないけど、面と向かうと言えないけどノートなら書けるという子、結構いるんですよ。あの子は普段あんな態度をしているのに、実はこんなにマイナス思考なの？とか、わりとそういうものが見えてくるんですね。それに対して、なんか赤ペン先生みたいですけど、長いコメントを書くわけですよ。そのやり取りの中で、チームのモチベーションやチームの目的というのは建前上ここだよと見せておきながら、ここについて来られない子に対しては一人一人に、一人一人の動機というものを与えるんですよ。

あなたは今、試合に出られないけれども、絶対チームにとって必要な人間だから、ということをおっしゃるようになって。その中で、じゃあ彼女の役割は何なのかというのを、そのノートの中でやり取りする。そうすると、マイナス

な気持ちのときも、安心してわりとできるみたいですよ。

(質問) ありがとうございます。

(田中) たぶん、それはまさに、私は会社でピラティスのスタジオを持っているんですけどね。ピラティスのインストラクターって 20 代前半の子が多いんですね。日報を書かせて、その日報にいつも赤で、そういうときの動機を持ち方はみたいなのを書いて。本当、そうですね、20 代前半の子たちって、言っていることと態度とその書く内容と全然違う。びっくりしましたよね。

(萩原) はい。

(田中) 最近の若い子たちって、なんて言うこと自体が嫌ですね。

(萩原) 嫌ですね。

——中略——

(田中) 今日、萩原さんのお話を伺って、「意味付け」というので私は、今日はぴんと来てしまったんですけど。本当につい先日、アテネ・オリンピックできちんと完全燃焼した元選手が、非常に今、悩んで。そのときにすごく彼女は泣いて、何か意味を探してくれと。私の生きる意味を探してくれと。この今の状況では、生きる意味が自分では見つけられないので、意味を探してくれと言われて。

思い出すと、元選手で 2~3 年とかたった選手、元選手で、よく相談というかメールが来たりとか、電話で話すと、必ずこれをやっていいと、京さんならどう思いますかとか、これ、やっているものの説得力を何かくださいとかということと言われるんですね。なので、ああ、そういうのを探しながら生きていращやるのは、あ、そうだ、萩原さんもそうだなと思って。やっぱりその辺はありましたか、自分で、気持ち的に。

(萩原) すごくありましたね。すごくよく分かるというか。さっきちょっと、プチ引きこもりになった期間があったと申し上げましたけど、結局、競技で全部育ってきているので、アイデンティティーというものがもしあるなら、全部バスケット生活の経験が元になるんですね。例えば、あいさつをするのはどうして?とか、どうして試合では相手と戦わなくちゃいけない?だとか、そういうのも全部バスケットで私は説明されて育ってきている。競技を引退するということは、その自分のど真ん中の部分が根こそぎ抜ける、ということです。

日常生活で何かやるといったときに、競技を離れてしまった自分は、どの仮面をかぶって電車に乗ればいいのか分からない。というので、外に一歩も出たくないというときがあった。だから、彼女のその泣く気持ちというのは非常によく分かる気がするんです。そのときの自分というのは非常に情けない、というか、人に見せたくない自分だったので、メンタルの先生にさえ相談できなかったんですけど。

すごく考えたのは、意味なんかなくてもいいんじゃないかな、というのは最終的に思って。いや、意味はあった方がたぶんいいと思うんです。動機だったり、意味付けということ、今日、田中さんはすごくおっしゃってくださっていましたけれども。何か意味はもちろんあった方がたぶん強いと思うし、あった方がそれに邁進できると思うんですけど、私が 1 回プチ引きこもりになったときに思ったのは、別に何か自分がやっていくことに意味なんかなくてもいいんじゃないの。意味ということにもものすごくとらわれすぎてしまって、何かやることについて必ず

意味がなくちゃいけないと、逆に思っちゃっていたんですね。

現役のときというのは、1つの目標を達成するとまた自動的に新たな目標というのが設定されるんですよ。この大会が終われば自動的に次の大会、これが終われば自動的に次の大会というのがあったので、意味を考える必要はなかった。そうなんだけれど、意味を考える必要はないんだけど、必ず何かその意味に向かって走っている自分だったので。だけど、自分のそのアイデンティティーというものが根こそぎなくなったときに考えたのが、すごく変な話になるんですけど、取りあえず生きていけばいいじゃん、と思ったんですよ。

生きてさえすれば何とか必ずなるし、今、私はちょっと疲れていろいろ見失ったりしているけど、必ず何かそのうち見つかるはずだから、とにかく生きてさえいけばいいんじゃないかなって。今なんか、何したって食いつぶされることはないだろうと。コンビニのレジだっていいんだから、最後は、というふうに思って。そこから始まれば、意味というものをまた見つけられたときに、強く邁進できるのかなとそのときは思ったので。だから、悩みながら迷いながら、でもそういう自分も嫌いじゃない、みたいな。今はそういう感じですね。

(重野) 本当、まだまだ聞きたいんですが。今日、ずっと萩原さんのお話を伺って、以前に栗原さんが来たときもちょっと言ったんですけど、知らないことは強い、知らないことは弱いと、この相反する2つを持っているなど。そのことは今日あらためて感じたんですね。やはり、ある一面、ある一時期、絶対すべてをそれに懸けなきゃいけない時期を、みんなたぶんアスリートの人たちは通ってきているんですけど、それはすべてだけとすべてではないというたぶん二面性がある。それを競技を通じて完全に得られたというのは、すごく幸せなことだなと。我々もたぶんそうだろう。そういう領域に入っているかなという気がしています。

きっとお父さんの存在が強いのかなと思っていたら、そのメンタルトレーナーの師匠がいて、やはり特に1つのことに打ち込んでいる方に対しては、重要な他者というかすごく大事な存在で必要だなというのはあらためて今日感じました。今日は本当に多くの発見があって勉強になったなという会でした。

(萩原) ありがとうございます。

— 萩原 美樹子 プロフィール —

1970年福島県福島市生まれ。

蓬萊（ほうらい）東小学校—蓬萊中学校—福島県立福島女子高校（現・橋高校）

—早稲田大学。

10歳の時、バスケットボールプレーヤーだった父の影響で、バスケットボールを始める。

1989年（平成元年）共同石油株式会社（現・株式会社ジャパンエナジー）入社。同時に女子日本代表入り。日本リーグ優勝1回、全日本総合選手権優勝4回。93年度から4年連続日本リーグ得点王、フリースロー賞受賞1回、優秀選手賞受賞8回、年間ベスト5選出7回。日本代表としては、96年アトランタ五輪7位 入賞、得点ランキング5位、3P部門5位。98年ドイツ世界選手権では得点ランキング同率2位。97～98年、アメリカ女子プロバスケットボール機構（WNBA）のサクラメントモナークス、フェニックスマーキュリーで2シーズンプレー。99年1月、現役引退。

引退後は早稲田大学第二文学部に入学し、歴史・民俗系専修にて日本史を専攻、05年3月に卒業。01年より早稲田大学女子バスケットボール部アシスタントコーチ。03～04年女子日本代表アシスタントコーチ。04年8月はアテネ五輪（10位）に参加。

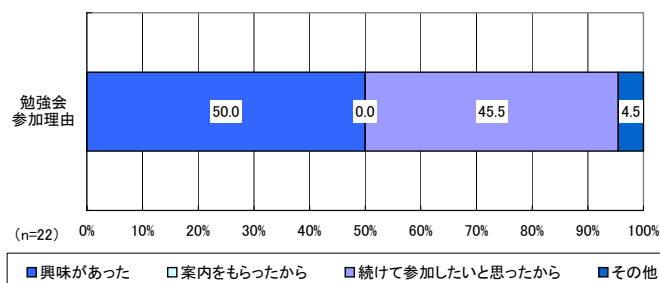
現在は、株式会社ジャパンエナジー・CSR事業推進部に所属。

バスケットボール及びスポーツ全般の講習・講演に携わる傍ら、早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程にてスポーツ教育学を勉強中。また05年度より早稲田大学女子バスケットボール部コーチ。

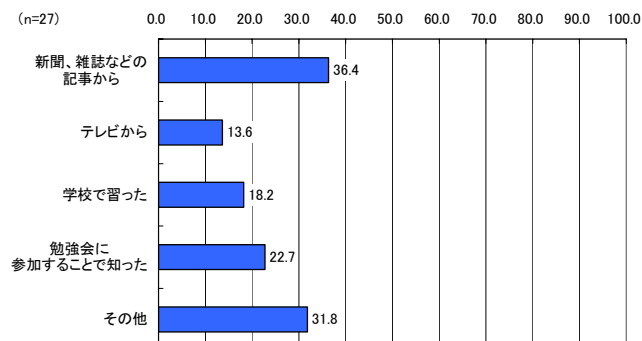
2. 第 18 回 アスリートのためのキャリア・トランジション勉強会 アンケート集計結果

アンケート総数:22

1. 勉強会参加理由



2. 興味、関心について



3. 勉強会はどうだったか。

- ・ 今回初めて参加させていただきました。私自身ここ 2,3 年で 2 度のトランジションを体験しています。サーカ一選手としてケジメをつけたこと、そして転職を経験していることです。今日は実際に様々なトランジションを経験されている方のお話をお聞きしまして色々考えさせられました。
- ・ アスリートではありませんが、私も最近色々キャリアということについて考え込むことがあり、少し深い穴から抜け出すきっかけになりそうです。ぜひ次回も参加させていただきたいと思います。
- ・ 自分も色々悩む方なので、共感することが多かった。その中で常に挑戦していく、新しいことを始める姿がすばらしいと感じた。
- ・ 萩原さんのお話を基に、金井先生が一般化してアスリート以外の人の人生にもあてはまることなのだとということをお話いただき、とても面白く、勉強になりました。
- ・ 今日初めて参加させていただきました。貴重な話が聞けて良かったです。今後、自分のキャリアを形成する上で参考にしたいです。
- ・ 今まで悩み揺れ動いた様子が分かりました。毎回とても興味深い内容でエスが、キャリアトランジションとして本当にはまった勉強会でした。
- ・ 初めてプロ選手のお話を聞き、自分の知らない感覚(世界)を知った気がしました。スポーツ選手としてだけではなく、これからの社会生活にも当てはめられるキーワードが多く、とても考えさせられる会でした。
- ・ 精神的にもすごい強さを感じた。芯の強い方でした。自分もここで満足せず頑張ろうとやる気をもらいました。
- ・ 「女性とスポーツ」サミットでお話を伺ったことがあり、とても興味深くききました。
- ・ 選手のキャリアについてここまで深くお聞きする機会がこれまでなかったため、非常に勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 私も人生の意味づけを探して途方にくれたことがあったので、日本史を学ばれたときの「なくなっっていい、生きてりゃ・・・」という話に大きくうなずきました。きっと現代、この意味づけを持つ、持てる、持っていないということから目をそむけているような人が多い気がしますので、このような話をいろんなところで話される会が必要かと。
- ・ 元気の出るすばらしいお話でした。とくに、お一人で講演されるのではなく、お三方でやりとりがあるのがとても興味深かったです。
- ・ とても面白かったです。
- ・ 発言のひとつひとつが非常に興味深く勉強になりました。
- ・ 金井先生というサプライズもあり、興味深い時間になりました。ありがとうございました。
- ・ とても勉強になりました。ありがとうございます。
- ・ 大変勉強になりました。ありがとうございました。本や論文からでなく、やはり”生”の声から学ぶものは大きいと改めて感じました。
- ・ スポーツの世界を超えて、一般論として、考えられることであると改めて感じた
- ・ 前々回の栗原さんの話のときもそうでしたが、やはりアスリートの方の話の中には一般人が気づかないことがいくつも含まれていて、吟味、内省のよいきっかけになります。*金井先生へ:1 回目のリタイアが早いのはアスリートではありません。"7,5,3"と言われる若年の離職(転職)もそうですし、30 歳を超えての仕事や職業に関する転機もそうです。
- ・ 萩原さんは、自分で色々考えて決断してきた方だというのが印象に残りました。答えが明確なのがすごいと思いました。自分を信じているのだと思いました。

- ・ 目標、動機の設定がわかりやすかったです。特にオリンピック終了後の目標喪失時の動機の設定がわかりやすかった。

4. 日本のセカンドキャリア支援の現状

- ・ アスリートのキャリアトランジションは日本においてはまだまだ広まってはいないと思います。高校、大学でのトランジションをもっと取り上げてほしいです。けしてトップアスリートだけの問題ではないと思っています。
- ・ 最近、とあることがきっかけでアスリートのキャリアトランジションについて勉強するようになりましたので、まだまだ私には未知数だということが今日ではっきりしました。これからは私の1つのテーマとして、考えていきたいと思っています。
- ・ 神戸大学の先生のようにそういう研究を大学でしていることをよく知らなかった。もっとそういう研究が進み、また社会でも認知されて、人に何度も努力すればチャンスがある社会になってほしい。
- ・ 最近つくづく思うのは、教育こそ最大の資産だということです。スポーツ馬鹿を作るのではなく、スポーツをしている人を縄で縛ってでも必要な教育をしていく、それがもっとも効果的なセカンドキャリア支援だと思います。
- ・ アスリートの方の多くが指導者になっていると思います。まだ、勉強が足りないのですいません。
- ・ 選手ではなくなった時点で人としての価値が低くなりがちであると思います。支援がしっかりしていればそんなこともないのではないかと考えます。
- ・ アスリートのセカンドキャリアはプロ選手ではない自分達にはほとんど知られていない世界だと思う。プロ選手は引退後タレントかコーチになるくらいしか道はないのではと考えている人も多いと思う。
- ・ 選手であるときは、数多く取り上げられていたが現役引退後はなかなか取材されていないのが現状
- ・ あまり社会的な問題としてとらえられてはいないと思います。ニートや引きこもりの中に「元」スポーツ選手という人も結構いると思うのですがどうでしょうか。なんとなく世間の優先順位からもれている気がします。
- ・ 一般企業人の引退と比べ、軽視されがちであると思う。
- ・ アスリートの選択が増えている気はしますが、まだ競技種目、性別によってバラつきがすごい。
- ・ これから、実践的なサポートにつながるようなよい研究がたくさん生まれることと、それに平行してアスリートのセカンドキャリアについてアスリートが語る生の声のドキュメントが豊富になることが肝心だと思いました。
- ・ まだまだ足りない。理解度が低い。
- ・ 選手として引退すると、すべてが終わるようなイメージがある。人としては変わっていないのに選手じゃなくなるとその人自体じゃなくなるように周りがとらえている気がします。話の中にもでてきましたがアイデンティティに関わることかと思えます。
- ・ まだシステムのサポートが十分でない
- ・ やはりまだまだ言葉そのものすら浸透していないように感じます。アスリートや研究者、チームスタッフにもそうですが、それ以上にスポーツに携わらない、興味のない方々には、まったく知識としてないと思います。
- ・ スポーツ選手としてのアイデンティティの喪失から、セカンドキャリアを得ることでアイデンティティの復活、それが死生学に近いことはよく言われています、そしてそれを教える教育を「デスエデュケーション」と呼んでいます。その「デスエデュケーション」を上手くキャリアトランジションに応用できないか考えております。
- ・ 一般人のキャリア支援もまだまだ十分な理解が足りない状況なのに、特別なニーズを持った人々のキャリア支援は更に未開状態ですよ。
- ・ (一部の)海外プログラムと比べると一貫性がみられない。まだまだこれからかなと感じます。

5. 今後の勉強会にて議論したいこと

- ・ 高校・大学でじっさいに学生と近い立場で接しておられる方の話を聞きたいです。
- ・ アスリートのキャリアトランジションと、アスリート以外のキャリアトランジションについての違いが知りたいです。(私自身、アスリートとしての経験が無い分、アスリートにとってのトランジションがどれほどのものなのかというのが理解しきれないからです。
- ・ 私は現在アメリカのマイナーリーグ(野球)の審判をしています。いまいっしょにアメリカで審判していて、元パ・リーグの審判「平林岳」さんの話なんかはどうかと思います。彼は自らパ・リーグをやめアメリカに挑戦している方です。彼は(株)らいつ所属の方です。
- ・ 金井先生のお話をもっときちんと聞きたいです。
- ・ 実際に選手を引退してまったく違う世界で仕事をしている人の話を聞いてみたい。
- ・ 今日の萩原さんのようにセカンドキャリアで活躍している方のお話をもっとききたいと考えました。
- ・ 実際大学でクラブの監督やコーチをされている方に、「ウチはこういった指導方針で先を見てやっている」という事例がありましたら。
- ・ まったく極端に逆の世界ですが、引退が思い切り遅い世界のひとの話もひとつ聞いてみるのはいかがですか。一昨日まで恩師のエドガー・シャイン教授が来日していたのですが、78歳でまだお元気で同じ学会という世界で、実務の世界とつながりながら活躍。あと、すもうのほうに仕組みのある世界。
- ・ 私も”バランス”というKEYが気になっています。現役(実業団)の人の仕事と競技とのおりあいについて聞い

- てみたいです。
- ・今現在、現役の選手の話。今後どうしていききたいのかなど、まだ経験していないこと(引退)への考えをきいてみたい。
- ・キャリアトランジションへの意識と共存させるべきアスリートとしての競技意欲と絡ませて元選手にお話して頂けたら嬉しいです。
- ・教育学の学者によるキャリアに関する話や、アイデンティティに関する話、一般論から、スポーツを考えることは興味深いと思います。
- ・現役ないしは今日の萩原さんのように現場にいる方のお話を是非。

6. ご意見

- ・スポーツ選手だけが直面する話ではないということを強調していけば、一般の人をもっと興味を持ってくれるのかと思います。
- ・スポーツ選手だけでなく、いえる事かもと感じたので、何かに夢中になった人との共通点など知れば良いと思います。比較みたいなのを。
- ・新しい世界で活躍している人をもっと紹介してほしい。
- ・先日サッカーの城選手が引退されるという報道がありました。すでにライセンスをお持ちで、監督業を視野に入れているそうですが、現時点でのトランジションとしてはOKなのか？
- ・この会を何かの形でまとめてほしいです。
- ・インタビューの記録を、そのままだと問題のあるところは編集の手を加え、ご本人のチェックを経て田中さんと重野さんのコメントつきで本になったら最高です。
- ・本勉強会にマスコミの人を入れて、雑誌テレビで扱ってもらうことはできないでしょうか。
- ・より多くの人に知ってもらう為にWEB上で展開していく。地方の人にも見てもらえるし、将来的にはNETで中継とかしてもおもしろいかもと思いました。
- ・「4」にも書いたとおり、一般の方々にも”アスリートのキャリアトランジション”という問題をまずは認識してもらうことが必要だと思っております。そのことで、”アスリート”というキャリアの素晴らしさも広く知れ渡ると思います。
- ・キャリアトランジションおよびセカンドキャリアについての「正しい認知」とは何ですか？
- ・”セカンド”という言葉を取り去るのはいかがですか？
- ・いつもありがとうございます。

2006年11月24日 勉強会参加者(順不同/敬称略)

永松 旬	岡田 美紀	岡本 るみ子	久保 悠也	金井 壽宏	桑原 正治
今蘭 由望	佐瀬 毅	坂田 純代	笹氣 理敬	山下 修作	志方 雅子
室田 真人	小林 智香	松尾 良子	水谷 初子	青山 剛久	石井 美恵子
谷口 美幸	谷川 泉	渡辺 明日香	内田 美貴子	野中 雅貴	鈴木 美帆
濱野 太郎					

次回勉強会スケジュール

第19回勉強会

2006年1月24日(水)18:30~20:00

ゲスト

相馬浩隆 (そうま ひろたか)氏

筑波大学トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト 専任研究員

テーマ

「日本におけるアスリートのキャリアトランジションプログラム開発事情」

場所

ミズノエスポーツ

事務局:株式会社MJコンテス

東京都港区白金台 4-5-7-205

TEL 03-3447-2890 FAX 03-3447-2893

田中ウルヴェ京

清水栄子

ご意見・ご質問などございましたら事務局までお問い合わせください。